なんとなく”ネギま”

アルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なんとなく”ネギま”

【Ｎコード】
Ｎ６６５４Ｓ

【作者名】
アルス

【あらすじ】
初作品です。駄文・見にくい等あると思いますがやさしく見守ってください。
オリ主最強系になるかと思います。そのようなものがお嫌いな方はバックしてください。
かんばって更新していきたいと思います。

プロ（前書き）

初投稿！！
第一話”プロローグ”です

プロ

やあ、俺の名前は日影　カヲル今現在俺は、真っ白いどこまでも続くのではないかと思われる空間の中にいる・・・・。
そして俺の目の前に涙を流している十歳前後だろうと思われるかわいい女の子と二十代くらいのお姉さんが居た・・・・!!
『俺はどうしたんですか?、なぜ泣いているのですか?』
と聞いてみると
お姉さんが
「ごめんなさい、あなたの心がとても純粋で綺麗でね」と
女の子が
「今の人間で貴方のような人はいない」と
『・・・・・＼＼＼』

「照れなくてもいいのに、貴方はそのくらいすばらしい人なのよ。短い人生のなかで、数多くの人を助けて最後は二人の子供を居眠り運転のトラックから助けると・・・やっぱりすばらしいわ」
たしかに俺は助けたことはあるけど・・たいしたことはしていないと思う・・・・。うん!?まてよ・・今短い人生の中で・・・・最後にといわなかったか??ってことは俺は死んだのか??
「そう・・・貴方はトラックから子供を助けて引かれて死んだ・・・・」
!!考えていることを・・・
『ところで・・あなた方はどちら様でしょうか??教えていただきませんか?』

「神様と呼ばれているわ」

「・・・神」

『神様ですか・・・ところで俺が助けた子供は無事ですかね？』

「無事。」

「無事よ。奇跡的に怪我ひとつないわ」
やっぱりすばらしいわね自分ではなく助けた子供たちの心配をするなんて

『そうですか。よかった。ところで俺はこれからどうなるのでしょうか？天国にはいけますかね？』

「もちろん天国は確実よ・・・もしよかったら貴方を転生させてあげたいの・・嫌かな？」

『転生ですか・・・』

「そう・・転生。嫌？」

『嫌ではありませんが・・・そうですね・・・うん、わかりましたお受けします。』

「そう、よかったわ」
貴方には私たちを超える神になれる素質があるからね・・悪いけど

転生先で少し神になれるように鍛えてもらわないとね・・・

『それでどこに転生されるのですか？元の世界は無理ですよね？』

「無理。」

「そうね・・ん～～よし魔法先生ネギま！？の世界に行ってもらおうかしら。ダメ？」

『・・・マンガの世界ですか・・別にＯＫです。』

ネギまの世界か・・魔法があるんだよな俺も使えるかな？使えなきゃ死ぬよな・・・まぁいいか

「大丈夫よ！貴方には好きなだけ能力を付けてあげるわ。何でもいいわよ」

『いえ、能力とかはいらないので俺の家族を・・・母さん・父さん・妹を幸せにしてやってくれませんか？お願いします。』

！！さすがね神になれる素質があるだけのことはあるわね・・・惚れそうだわ

「わかったわ。任せて必ず幸せになれるようにするわ。でも能力は付けさせてもらうわね・・・能力については私たちが決めるわ」

『わかりました。ありがとうございます。』

「それと転生先では日影　カヲルの名前は使えないの・・・だから私たちが名前をつけてあげるわ。ん～～なにがいいかしら」

「アルス・ヴァレンタイン。」

「ん、いい名前ねこの名前でいいかしら？」

『はい！ありがとうございます。とてもいい名です』

「そうそれじゃ”ネギま”の世界にいきましょうか、そこの扉をの向こうがネギまの世界よ」

『わかりました。』

そう言って俺は扉に手をかける

「「貴方の新しい人生に幸があることを願います」」

ギィぃぃと扉が開き

『ありがとうございます。それでは行ってきます。（ニッコリ）』

「「＼＼＼！？」」

「ふぅ・・・・行ったわね。あの笑顔はずるいわね」

「・・・ずるい。」

「あの子大丈夫かしら」

「大丈夫・・彼はとても強い、心も魂もだからきっと神にもなれる。」

「そうね・・・・あとはあの子に能力のこと教えなくてはね。手紙でいいかな、早速書かなきゃね」

プロ（後書き）

次はステータスでもかこうかなとおもっています。

ステータス

・名前　アルス・ヴァレンタイン
・性別　おとこ
・年齢　１８歳　１８５センチ　７５キロ
・容姿　ＦＦ７のザックスって感じ

身体能力＆魔力・気（初期値）

・魔力　ナギと同じ位
・気　ラカンと同じ位
・身体能力　ラカン・ナギ位

神様からもらったチ・カ・ラ

・複写眼（暴走はしない・視力は５．０）
・アンサートーカー
・限界突破（ＤＢのサイヤ人的な）
・不老（不死ではない・何歳にでもなれる）
・マンガ・アニメなどの技

武器

主人公はハーディスを良く使いますむしろ相棒かな

アニメなどの技

Ｈ×Ｈのキ〇アの電光石火・疾風迅雷を使う
その電気でレールガンも撃ちます。ＤＱ・ＦＦシリーズからも数多

く出します

魔法始動キー

ラスト・マイ・マジック・マテリアル

ネギまの世界に到着！（前書き）

今回は能力についての修行ですね

ネギまの世界に到着！

ん～～ここはどこかな・・・・??え～とたしか神様に転生させてもらって・・・・扉をくぐったよな・・・・・って！ここがネギまの世界か！?

「そうよ、無事ついたみたいね」

『・・！?　誰だ?・・・・もしかして神様?』

「あたりよ、貴方は大体原作の２００年くらい前かしら・・・・におくったわ。あとはこちらの独断で不老にしちゃったわ。能力についてはポケットに手紙が入ってるからそれよんでね」

＊注・原作２００年前となっていますので設定等はぐちゃぐちゃになりますね・・・たぶん、はい

『不老ですか・・・』

まぁいいか、不死ではないみたいだから死ねないわけじゃないし・・・・

「じゃあ、新しい人生を・・・」

と言って神様はスゥーっと消えていった

『じゃあ、まずは能力の確認でもしますか・・たしかポケットにっと・・・・・お！あったあった。え～っとなになに?』

―――――――――能力―――――――――

・複写眼（あらゆる魔法の解析・解除そして一度見た魔法は覚えられる・・・もちろん暴走はなしね）

・アンサートーカー（どうしたら避けられるか、攻撃が当たるか、複雑な計算式も瞬時に答えがでる）

・限界突破（鍛えれば鍛えるほど強くなる）

・不老（年齢は自由に変えられる）

・マンガ・アニメ等の技（知っている物のみ）

以上

あと魔力・気は高めだからまぁ鍛えればあがるわ容姿はＦＦ７のザックス見たいな感じだからかなりかっこいいわよ。

・・・・・・・チートだな『はぁ・・・とりあえずは能力を使いこなせないとね・・・修行でもしますか。』

どこでしようかなっと。ん～～人がこなさそうなところは・・・・・っおこの森がいいな良し！修行開始っと。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・

・・・
・

修行開始から５０年がたった・・・・。ん?適当すぎるだって?そんなことはないちゃんと修行はしたさ

修行の内容はっと
・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・
・・・
・

修行開始１日目

『とりあえず現在の身体能力の確認だな。』

１００メートルを走ったり・持久力を調べたり・木を殴ったりしたところ・・・１００メートルなんかはもう走ってなんかいない・・・（汗）だってなんかもう・・・・うん最初のダッシュだけでいいなんてもう瞬動的な感じだし。持久力はまったく疲れないし（１日中時速５０キロで走っても）木なんかは砕ければよかったのになんか貫通するしこんなのじゃあ殴ったりしら・・・・・・ゾクッ考えたくもない・・はぁとりあえずは制御しないとな

制御するのに１年間かかった。
『次はアンサートーカーを使ってみようかな。まずは適当に１０桁の計算でもしてみよう・・・・どうやるんだ??頭の中で考えればいいのかな?よし。やってみよう。う～～～～んこうかな?・・・・

・！？おぉやばいなこれは瞬時に答えが浮かんできたぞ！すごいなでも結構つらいな頭をすごく使うのか？ん～～これも鍛えなくてな、あれこれ使えば力の制御の仕方なんて簡単にわかったんじゃないのか・・・（泣）』

１０年後・・・アンサートーカーの制御も完璧になった、今ではＯＮ・ＯＦＦの切り替えも瞬時にできるようになった。たぶんていうか確実に今の俺に解けない計算などはないだろう大学の試験とかなんで絶対満点取れるな・・・・・学者たちがわからないことでもう絶対わかるな！

『でも苦労したな・・・最初なんて頭使いすぎでしょっちゅう倒れたし、鼻血とかもすごかったな』

『次は魔力と気だな、魔力は複写眼があるから余裕だったな今じゃ上級魔法も無詠唱でいけるしな』
でも始動キーはちゃんとあるぞ！
ラスト・マイ・マジック・マテリアルだ！誰に話しているかってそれはもちろん画ｍピィーーー＊規制が入りました。

『次は気だなそれはもうアンサーちゃんのオンパレードだよ。当たり前なのだよ、アンサーちゃんのおかげで今じゃ”ドラゴン〇ール”の舞空術・気なんかもとばせるわ！』

『次は漫画・アニメの技でもつかってみるかな・・・・俺が知っているのはっと・・・・・・・よしやってみるかえ～～とじゃあ”メラ”』
ボウっと火の玉がでた
『おっ成功だなこの調子でほかも・・・』

そのあといろいろやってみてＦＦシリーズのサンダーやリジェネなどもできたＤＱシリーズでは合体魔法のメドローア・メゾラゴンなどもできた。（メドローアは消滅魔法なのでいろいろ修行して今では大きさを自由にできる。）

『よしあとは・・・あれもできるかな？えっとまずは自分に電気を充電してっと”サンダー”っ結構しびれるなビリビリする・・・よしこれでたしか溜めた電力で体の反応速度を上げるんだったな”電光石火””疾風迅雷”よしできた！』
これはもちろんＨ〇Ｈのキ〇アの能力である

『これにこのオリハルコン製の銃ハーディスを使って・・・・・・・・・行け”レールガン”』
すさまじいスピードで弾丸は跳んでいった。この技は黒猫様の技である。

っとなんだかんだで５０年が過ぎていった。
『よし、修行しゅ～りょ～うっと。原作開始までまだ１５０年近くあるな旅にでもでるか・・・』
最終的に魔力・気はナギ・ラカンの５倍ぐらいになった

ある～日森の中幼女にであぁ～た（前書き）

原作キャラと遭遇！！

ある～日森の中幼女にであぁ～た

サイド《？？？》

吸血鬼になり、私をこんな姿にした男に復讐を果たし、あの城を出てから数百年が経った。今では吸血鬼らしい弱点も消え、それなりに力もついてきた。賞金稼ぎの魔法使い相手にも不覚をとることはほとんどなくなった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

しかし今回ばかりは芳しい状況ではなかった。

「ちっ！」

思わず舌打ちをする。
完全に油断していた。まさか不死殺しの装備を持ってきているとは思わなかった。ここ最近力を付けてどうやら慢心していたようだ。このままでは捕まってしまう。

「ケケケ、御主人ピーンチ」

このアホ人形は何故こうも緊張感がないのか……。我が従者ながら頭が痛くなる。

「……おいチャチャゼロ、あいつらを何とか足止めできんか？」

「デキルゼ。……片腕ガ、モゲテナケリャナ？」

ちっ、ともう一度舌打ちしてしまう。この状況いったいどうしろと言うのか。吸血鬼にされたときにも神を散々恨んだが、いっそう憎しみが強くなる。せめてあの不死殺しの装備をどうにかできれば、状況はかなりましになるのだが。そのためには、時間稼ぎが必要なのだがチャチャゼロがこれではどうにもならない。……これは詰んだか。

そう考えていると、すぐ近くに私を追っている奴とは別の魔力を感じた。どうやら考え事をしていて気づくのに遅れたらしい。このまま進めば丁度挟まれる形になる。奴らの仲間だったらもはや突破口はない。

そんなことを考えているうちにも前方の存在と距離が近づき、ついに接敵してしまう。

「――――――っ」

鉢合わせた両者が共に息を呑む。反応から見たところ奴らの仲間ではなさそうだ。

ふとその男を見ると黒髪に黒い目と、ここらではあまり見かけない風貌をしていた。どうやらその男も追われているらしかった。それも追いかけてきているのは魔法使いらしい。どっちにしても状況は悪化してしまった。

どうすれば、と考えていたその時私を追ってきていた魔法使いが魔法を撃って来る。呆けていたせいで敵の接近を許してしまった。

「おい、貴様そこをどけその後ろの吸血鬼を殺さなくてはならないんだ！！はやくどけ！」

相手の魔法使いの一人が

そして男がこちらをチラッと見て
「魔法使いどもにそれはできないな明らかに一人に大して大勢ではフェアではないしな」
あの男は何者だ??よりにもよってこの私側に付くようなことなどいって明らかに不利ではないか!!
すると魔法使い共が
「じゃまするならまずお前から殺す覚悟しろ!!」
「いくぞ!!」
「「「魔法の射て・連弾・光の矢９」」」
「「魔法の射て・連弾・炎の矢１１」」
「「「魔法の射て・連弾氷の矢１７」」」
あの男!!だいじょうぶなのか?
すると男は
『正当防衛だ。悪く思うなよ!』
男は魔法の射てをすべて避けて大きな銃を取り出して魔法使いどもを
『六連クイック・ドロウ』
と言って六人戦闘不能にした。
「どっどうしたお前ら・・・・銃声は一発しか聞こえなかったのになぜ六人も・・・・くっくそが、きさまっ!」

確かに一発しか聞こえなかった。だがあの男は撃つ前に”六連”と言っていた・・・・・・あの男何者だ！！

『さぁ！どうする？』
と男が言うと魔法使いは呪文詠唱し始めた

「契約に従い、我に従え、炎の覇王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドム焼きし火・・・・・」

魔法使いは上級魔法を唱えてきたすると男は・・・・・・自分の体に「白き雷」を撃った
そして男は体に電気を纏った！？あれは私の闇の魔法に似ている・・・・・・と思っていると男は”電光石火”と言って相手の魔法使いが呪文詠唱しきる前に高速で叩きのめした・・・・・

「……大丈夫か？」
と私を救った男が不安げな顔で、様子で尋ねてきた。
サイドアウト――――

サイド《アルス》

困惑した、驚愕したと言ってもいい。魔力の方に向かい、いざ辿り着いてみればそこにいたのは、ローブを着ていて顔を窺い知ることはできないが、なにやら人形をつれたどう見ても子供としか思えない背丈の者だった。
様子を見ると、すぐにこの子も俺と同様追われていることが見て取れた。血を流しながら、こんな森の中で友達と追いかけっこという訳でもあるまい。

この子の実力がどれほどのものかは知らないし、何をやったのかも知らない、しかし子供相手に大人が大勢で襲い掛かるというのは少々やり過ぎではないだろうか。
当初は逃走を図ろうと思っていたのだが事情が変わってしまった。魔法使い共が攻撃してきたからだ、流石に子供相手に大勢で襲う外道なことを積極的にする気にはなれない。ならば、どうするか。戦う？しかないな。

と思い「魔法使いどもにそれはできないな明らかに一人に大して大勢ではフェアではないしな」と言ったら
魔法使い共が
「じゃまするならまずお前から殺す覚悟しろ！！」と攻撃してきた

「「「魔法の射て・連弾・光の矢9」」」
「「魔法の射て・連弾・炎の矢１１」」
「「「魔法の射て・連弾氷の矢１7」」」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
そして俺は「正当防衛」だと言いながら相棒でもあるハーディスを取り出して撃った。相手も一発の銃声で六人も倒れるとは思っていなかったのだろう。魔法使いは驚いていた。

「どっどうしたお前ら・・・・銃声は一発しか聞こえなかったのになぜ六人も・・・・くっくそが、きさまっ！」

『さぁ！どうする？』

といったら魔法使いは呪文詠唱し始めた

「契約に従い、我に従え、炎の覇王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドム焼きし火・・・・・」

魔法使いは上級魔法を唱えてきた・・・・まずいと思い俺はとっさに自分の体に「白き雷」を撃った

そして体に電気を纏い”電光石火”を使った相手の魔法使いが呪文詠唱しきる前に高速で叩きのめした・・・・・

そして

「……大丈夫か？」と少女に尋ねえた。

少女がわずかに俺の言葉に反応する。これなら間に合うな。そう思い治療しようと彼女に近寄る。

「……何をしている？」

と、少女が俺の行動に疑問を持ったのか問いを投げてくる。

「無論、かわいいお嬢ちゃんの治療を。」

「……はぁ？」

「……この傷は、不死殺し武器によってつけられたものだ。

そう簡単には治すことはできない。」

「不死殺し？」

少女が聞き逃せないことを口にする。

「……まさか、君も不老不死なのか？」

「君も（・・）だと？
まさかお前もそうだと言うのか？」

「そうだが、ん？いや違うな俺は不老だけだな・・・・話は後だ。
今は治療を優先だ。不死殺しだろうが、なんだろうが、治せるはずだ。」

そして俺は魔法というより呪文を唱えた『「ベホマ」』とすると、
彼女の体が淡く光り、一瞬でその傷を全て癒す。

「これで、完治したはずだが……。
体にどこか問題はあるかい？」

「いや、どうやら本当に完治したようだな。」

体を動かし、問題が無いことを確かめた後少女は俺に話しかけてくる。

「まずは礼を言っておこう。
……だが聞きたいことが、色々ある。」

「あたりまえか。わかった答えられるだけ答えよう。

……でもまぁ、その前にお互い名乗ろうか？」

そこでようやく俺たちはお互いの名を名乗りあった。

そして俺は知らずに原作キャラと関わっていた・・・

サイドアウト――――

その少女の名前はエヴァンジェリン

サイド《エヴァ》

「色々と聞きたいことはあるが、とりあえず私の名前は　エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ！一番気になることは、お前が不老ということだが。
それは本当なのか？」

「まぁまて俺の名前はアルス・ヴァレンタインという。で不老かどうかだっけ？それは本当だ。
と言うか俺以外にも不老。君は不死か、の人間がいるなんて、俺のほうが驚いたぐらいだ。」

……人間、か。こいつは魔法使い共が言っていた吸血鬼のこと忘れているようだな・・・・

「・・・私は・・人間ではない。」

「人間じゃない？」

「ケケケ、御主人ドウスンダ。」

うるさい、黙っていろアホ人形。
……私が吸血鬼だと言うことを知ったらこの男もほかの人間たち同様、私から離れていってしまうのだろうか。拒絶されてしまうのだ

ろうか。だがそれを黙って一緒に行動することになっても、いずれ知られてしまうかもしれない。そうでなくても知られてしまうかも、とビクつきながら一緒に行動することなどしたくない。やっとこんなに心が温かい人に合えたのにしかたない・・・・・言ってみるかもしかしたら受け入れてくれるかもしれないしな。

「……私は、吸血鬼だ。

……それも賞金首になるほどの悪の魔法使いの、な……。」

言った、言ってやった。いったいどんな反応をするのか…拒絶されるのか受け入れてほしな……

「吸血鬼かぁ～ふぅん」

「・・・それだけか？」

「それだけかって？だってさぁ……エヴァンジェリンちゃんはね、自分が言っているような悪の魔法使いって感じじゃないし……それに見た目も怖くないし…むしろかわいいよ。」

「……＼＼＼」

わっ私がかっかわいいだと…

「ケケケ、御主人ヨカッタナ」

うるさい、ボケ人形……無視だ、無視「そっそうだ、お前は不老と言ったが、どういう経緯でそうなったんだ。

まさか、生まれた時からそうだった訳でもあるまい。」

その私の質問に表情を若干曇らせる。

「……ん～～信じられないはなしかもしれないけど……実は俺はね

……」
なんだまさかこいつも人間じゃないとか？
「えっとね……転生者なんだ……」
転生だと！輪廻というやつか……ほんとなのか？でも嘘をついているようにはみえないな……
「俺はね、前世数多くの人助けたりしてね。死因がトラックに引かれそうな子供をかばって死んだんだよ……でね、その後真っ白い空間の中で神と呼ばれている人に俺の心は純粋で綺麗だから転生させてあげたいって言われてね……それで『力をあげるから次の人生を楽しんでおいでって』言われて、いらないから残された家族を幸せにしてほしいといったら『やっぱり綺麗だわ』的なことを言われて結局能力ももらって転生したんだ・・・・・・・・。信じられないよね。でね不老については力のひとつで良くわからないんだ・・・・。」
こいつは前世からもこんなに暖かいやつだったのだな……
「いや、しんじるぞ事実お前の心は暖かい……」
「…＼＼＼」
照れてるなストレートなことによわいのか？
「そういえばエヴァンジェリンちゃんはどういう経緯で吸血鬼に？言葉を返すようで悪いが、生まれたときからそうだった訳でもない

んだろ？」

む、相手の話を聞いてしまったからには答えぬ訳にもいかないか。

「エヴァンジェリンは言いづらいだろ、エヴァでいいあとちゃんをつけるな！それと、私の場合はな……」

私が吸血鬼になった経緯、そして私を吸血鬼にした男に復讐し、住んでいた城を出たことを話した。

「そうか……つらかったな」

と言ってくれた私はその言葉を聞いた途端、涙がこぼれた

「大丈夫、今は俺がいる。泣いてもいい」

「泣い…てなんか…ない」

「無理すんな、今は泣け、思いっきり泣いたらいい、すっきりする。」

私は泣いた

アルスの胸の中で思いっきり泣いた

アルスは何も言わずにただ静かに微笑んでくれた。

魔法世界にいってみよう　（前書き）

エヴァとお別れです。
少しせんとうはいります

魔法世界にいってみよう

サイド《アルス》

エヴァと出会ってからもう１００年近くの時がたった……なに!?

適当すぎだってそんなことはしらないい作ｓｙピーーー規制が入りました。

ふう仕方ない出会ってからの１００年間を簡単に教えてやんよ・・・

・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・・

・・・

・

まずは、　あの後エヴァが泣き止んで俺が……

「もう大丈夫か？」

「あぁ、　ありがとうもう大丈夫だ」

「これからエヴァはどうするんだ？」

「そうだな……とくにいくあてもないな……」

「ケケケ、適当ダナ御主人ハ」

「じゃあさ、しばらく一緒に行動しないか……？嫌ならいいけど……」

「ん、しっしかたないな……アルスがどうしてもと言うなら一緒に行動してやってもいいぞ！！」
むしろ喜んでって感じだ！アルスが嫌でも勝手に私がついていく……＼＼＼

「ケケ、御主人ハ素直ジャネイナ」
……このボケ人形はまたいらんことを

「じゃあよろしくな、エヴァ（ニッコリ）」

「あぁ……＼＼＼＼」
っくその笑顔は反則だ＼＼＼

「御主人真ッ赤ダナ。ケケケ」
またこのボケ人形は・・・

そして五十年位たった時エヴァが突然・・・・・・・・・

「そういえば、アルスはどれくらい強いんだ？」
などと言ってきたすると・・・・チャチャゼロまで

「ソイヤァ、知ラネイナオイ、アルス殺リアオウゼ。ケケケ」

チャチャゼロめ・・・

「だっだがここで殺り合うわけにもいかないだろう……ここでは周りに被害がでる・・・・・。」

これで大丈夫だろ・・・大丈夫だよな？

「安心しろ、こんなとこに魔法球の別荘がある！」

「ダメだったか……はぁ」

「どうしたんだ？」

「い、いやなんでもない・・・・・・」

「ケケケ、諦メロサァヤルゾ」

「じゃあ、いくぞ！！」

っくこいつら・・・・・・

「ってなわけで現在魔法球のなかだ」

「・・・・？何言っているんだ？ほらとっとと始めるぞ」

するとチャチャゼロがいきなり斬りかかってきた・・・・

「うわっと、あぶね！？」

「チッ外シタカ」

「しかたない…やるか、「魔法の射て・連弾・炎の矢１０１」」
チャチャゼロに向かって撃つ・・エヴァはいきなり大技を放ってくる

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、契約に従い、我に従え、
氷の女王。来たれ、とこしえのやみ、えいえんひょうが。全ての命
ある者に等しき死を。其れは、安らぎ也。『おわるせかい』」

「ちっ、ラスト・マイ・マジック・マテリアル、契約に従い、我に
従え、炎の覇王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、
ソムドを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の塵に。『燃える天空』」

「ふう……そうさいっと」
一時間ほどたたかっていると・・・・エヴァが

「なぜ、アルスお前は無傷なんだ？私はボロボロだぞ！？」

「まぁ、実力の差じゃないか？そろそろ決着つけるか・・・電気は
そんなにいらないな、じゃあ『雷の暴風』自分に撃って・・・・・・
そして『疾風迅雷』」

「ふん、まぁいい絶対勝つ！『エクスキューショナーソード』いけ
ぇ！！」

「無駄だよエヴァ、おれの『疾風迅雷』は相手の動きに感応もとい

反応して自動的に・・・・・瞬時に肉体が動くんだよ。相手より先にな・・・・・だからエヴァの攻撃は届かない。」

そしてエヴァの首をつかむ・・・

「俺の勝だね。」

するとエヴァが

「あぁ、私の負けだ・・・・・しかしその技はもはや反則だな。」

「いやいや、ちゃんと弱点はあるよ。体に電気溜めなきゃいけないし一日何度も電気浴びるわけにはいかないしね。それにエヴァの闇の魔法使えばあの反応は無理だけど近づくことはできると思うよ。」

「そっそうか・・・・・だが使う前はどうして無傷なんだ?？」

「あぁ・・・それはね、神様からもらった力のアンサートーカーっていうのでね・・・・・・・・・・・・・・・・・・といううわけなんだ！」

「チートだな、だがその力をつかえば”疾風迅雷”いらなくないか??」

チートだと自分でもわかってるよ・・・・。

「えっとな、この力使ってもあたるときは当たるんだあくまでも完全じゃない。」

「そうか・・・わかった。」

魔法球での戦いが終わってさらに五十年が経過した・・・・・・

そろそろ大戦がはじまるころだな・・・

「なあエヴァ俺はそろそろ魔法世界に行こうかと思う……だからここでお別れだ。」

「なんだ!?急に私と居るのが嫌になったのか??」

「そうじゃない・・・・少し魔法世界でしたいことがあるんだ・・・決して嫌になったわけではない。それに俺は不老で、エヴァも不老で不死なんだろ。生きていれば必ず合える。」

「それもそうだな私はもう少しこっち、旧世界を回るよ・・・・京都・奈良に行ってみたいしな」

「ん、そうかじゃあここでお別れだな・・・・・・そうだこれあげるよ。」

俺はブレスレットをエヴァに渡す

「これはなんだ?」

「ブレスレットだよ。それは『再会』のブレスレットなんだ、それが壊れないがぎり多分再会できると思うよ」

「ふ～ん、そうかありがたくもらっておくよ。」

初めて贈り物をもらったな・・・・・・＼＼＼

「じゃあな、エヴァ・チャチャゼロ！」

「あぁ、またな」

「ケケケ、マタアオウゼ！」

チャチャゼロは最近空気だったな・・・

さあ魔法世界に行きますか！！

紅き翼・・・・（前書き）

紅き翼と遭遇

紅き翼・・・・

サイド《アルス》

エヴァと旧世界で別れてからようやく魔法世界に来ることができた・・・・・・・・・・だが様子がおかしいな・・・・心なしかどこか遠くのほうで大きい音が聞こえるような・・・・？魔力も感じるし・・・・！？もっもしかして大戦始まっちゃってる・・・（汗）まぁいっかとりあえずは・・・・・・・・・「行くとしますか。」

サイドアウト――――――――――――――――――――――――

サイド《紅き翼？？》

ちっ…少しヤバいか…
帝国の奴らがかなりの数の刺客を用意してきやがったな…
つい最近、ラカンの筋肉バカ野郎が仲間になったからもう大丈夫だと思ってたらこれかよ…きついな……

「おい、詠春。あと敵はどれくらいいる」
「恐らく…２０００は下らないでしょうね」
「ちっ…面倒だな…」

どうする…こっちは約２０００の追手
お師匠は敵が召喚した龍の相手

アルやラカンは他の追手をやってるが…ちっ…
本当に面倒なことになってきた……ほとんど魔力もなくなってきたのによ・・・・・・・

「仕方ねぇ、早めに終わらせるほかねぇな」
「そうですね…このまま戦い続ければ明らかにこちらが不利となりますからね。」
「なら俺がさっさと…っ！！！」
その時、俺は…いや、俺の周りにいた奴らや詠春も感じ取った
この場にいる誰よりも強大な魔力を…
どうやら帝国側も感じとったようだな……。

「な、なんだ！？」
「こ、この魔力…悪魔か！？」
悪魔であればかなり拙い状況になる
しかもこれだけ強大な魔力だ・・・
今かなりの力を使ってしまった俺たちでは相手にならないだろう・・・・

だが…ここで少し妙なことに気がついた
その魔力のある方なのだが…殺気が全くといってないのだ……

それに加え、

敵側もこの魔力の存在に驚いているのだ・・・

「な、なんだ…一体…」
「分かりません…ですが、どうやら魔力の反応は真っ直ぐこちらに来ているようです」
「ちっ…何が来るんだ…」
やばいな・・・勝てるのか??

サイドアウト
――――――――――――――――――

やっと音の発生源までくることができたよ…・・・…
うん、やっぱり大戦始まってるね。

で、ここまできたのはいいのだけれども…

「………」
「………」

視線を感じてまわりを見てみると・・・・・・
誰も彼もが俺のこと見てるーーー！！！
しかも何か危ない匂いがというか…怖いんですけど……

「…貴様…【紅き翼】のメンバーか？」
…何おじさん…変なマント何かかぶって？？？
紅き翼側の人間？？それとも敵？？？

「答えよ、貴様は」
「う～ん…俺はアルスって言うんだけど…まあ悪か正義かって言ったら、正義って感じかな？」
「…成程、やはり貴様は【紅き翼】か」
「……」
ってことはこのおっさん敵か！？
「…死ね！！」

うおおおおぉ！？
いきなり魔法放ってきたよ！？

「危なっ！？」
その放ってきた魔法をアンサーちゃんを使って避け、俺はそのおっさんの後ろに回り込み……

「ダンッ・・・・」
おっさんの足と腕をハーディスで撃ち抜いた・・・

「き、貴様！！」

う～ん…何かさっきの人の仲間（？）みたいな奴らが一杯・・・俺に向かってきたけど・・・

そこで俺は・・

「不吉を届けにきたぜ！」

某・黒猫様のセリフを真似てみた・・・・若干はづかしく…後悔した（泣）

そういや、あれ以来戦ってないな……丁度いいから…ちょっと運動しますか・・・・・・・・そして

「修行の成果を見せてやる！」

今度は某・クリ○ンの台詞だ！！……もうこの際はっちゃけるか！

「燃え盛れ、最大火力、地獄の炎…」

実は…詠唱は関係ない…ＤＱの技は唱えるだけなのでこちらの魔法みたいに言ってカモフラージュしているだけだ！っと右手にメラゾーマ、左手にベギラゴン……合体。

「『メゾラゴン』！！！」

詠唱を終えると敵の中心にあり得ないほどの熱量の魔法を落とした・・それを喰らったものたちは皆体を焼かれ、死んでいった

「…うわぁ…やり過ぎた」

正直、心の中は罪悪感で一杯だった

人を殺すということは今まであまり経験したことのないことだったから余計に…

でもさっき知った、情報の中に、この集団は碌でもないことしかしない奴らの塊だということが分かったため、こうしたのだ・・・・まぁやりすぎたけど・・・

…本当にチートだね、俺の力って…

何かもう…どうでもいいやって感じだな～…

それから約一分後、その場には俺とさっき男が話していた【赤き翼】のメンバーのみしか残っていなかった。

とりあえず話をしてみよ…

俺はゆっくりと近づき、話をしようと試みる…

だが、何やら警戒しているのか…武器を構えようとしたり詠唱の準備をしようとしているんだけど…あたりまえか…

「あ～、大丈夫。俺は敵じゃないから。って言うかあっちがいきなり攻撃→俺危ない→正当防衛みたいな！！」

そう言うと少しは警戒を解いたのか赤い髪の奴は詠唱を止めた。

「「「「「な、ナギ！！」」」」」

「大丈夫だって、こいつからは殺気も感じねぇし」

「え～っと…俺はアルス・ヴァレンタインって言うんですけど…そちらのの名前は？」

「俺はナギ＝スプリングフィールド」
「…私は近衛詠春といいます」
「アルビレオ・イマ…アルと呼んでください」
「ゼグトじゃ。」
「ガクトだ。」
「ジャック・ラカンだ！お前つええな勝負しろ」
「えっと…ナギ・詠春・アル・ゼクト・ガクト・バカンね、「ラカンだ！！」……ところでここで何をしてたの？何か追われてるような気がしたんだけど？」
実は知っているがな…
「…そう言う貴方はは何を「アルスですよ」…アルスさんは何を？」

「今日、旧世界から魔法世界にきて…なんか大きな音がしているほうに着たら貴方達がいたんですけど…何かあのおっさんが俺に【紅き翼】かって聞いてきたと思ったら襲いかかってきたので。とりあえず撃退したんですけど…」
「と、とりあえずって…あれ、なんの魔法なんですか…」
「簡単にいえばあれはオリジナル魔法です」

「あ、あれがオリジナルだと！？な、あの威力ありえないだろう！！」
まぁ、確かにふつうならな……あいにく普通じゃないんでね…

「あ、そうなの？でもまだあの威力のオリジナルたくさんあるよ。」
「…あ、ありえねぇ…」
「…貴方はバグですか」
「バグキャラですね…」
「バグじゃな」
「い、胃が……」

「どうでもいい、早く戦おうぜ」
ラカン・・・・お前はチャチャゼロか??筋肉ばかっめ・・・・・・
というか
・・・失礼ですね
確かにバグなのは認めますけど…

「なあ、アルス。お前俺たちの仲間にならねぇか?」
「いいよ（一秒）」
「な、ナギ!?そして返事早!?」
「これからよろしくお願いします。アルス」
「よろしくのぉ」
「よろしくな」
「お、いいね。いつでも戦える」

何か詠春の立場が突っ込みになってるな・・・・あとラカン戦いから離れろ

こうして俺ことアルスは【赤き翼】の一員となることになった

紅き翼・・その後（前書き）

かなり跳びます・・・

紅き翼・・その後

いや～やっぱりナギとラカンは強いね
ん、紅き翼に入ったあとねラカンが戦おう、とかずっとず～～～～といいつづけるからさ仕方なく戦ったんだよね・・・・・・・・・
そしたらさぁナギまで・・・・俺も戦いてぇぞってね
仕方ないから戦ってあげたんよ。

もちろん俺が勝ったよ

最初のほうはアンサーちゃんの力を使って予測して避けてたんだけどね・・・・・さすがバグキャラ……だんだん攻撃が当たるようになってきてきつくなってきたから

魔法やめて気を使ってまずラカンを『ファイナル・フラッシュ』を撃って倒した。
これはもちろん・べ〇ータ様の技だ

そしたらラカンが「き、気合防御！！！」とかいいながらくらって気絶・・・・・・・

ナギは
「っち、やっぱつえぇな」
「行くぞ、「百重千重と重なりて、走れよ稲妻『千の雷』！！！」」
千の雷をはなってきやがった。

「おいおい、マジかよ・・・しゃあねえな」
俺はあえて食らって体に電気をためた

どかーーん！？
「良し、直撃だこれで勝っただろ・・・・！？」
煙が晴れていってアルスの姿が見えてきたするとアルスは・・・・・
「まじかよ、なんで体中バチバチしてんだよ。」
するとアルスが
「さすがに千の雷はいてぇし電気保有しきれないな……少し放電するか、『落雷』！！」
いきなり雷を放ってきた
「うわ、あぶね。」
なんとか避けるとアルスは・・・・
「『神速』」と言って俺の前に来た
「……！？」
一瞬で俺の前に来たんで反撃しようとしたら
「『疾風迅雷』」と言って俺が攻撃するまえに攻撃してきやがった
…そこでおれの意識がとだえた・・・・・・・
という感じで俺の勝ち！！
もちろんその後『ベホマ』使って回復させたよ

ま、まあそんなことは置いておいて…
兎に角、俺が【紅き翼】に入ってから連合は勢いに乗ってか連戦連勝
更には《グレート＝ブリッジ奪還作戦》では俺達は後世に残ってしまうんじゃないかってくらいの活躍をしたよ……
その際に俺に付けられた二つ名は【雷神】、【電磁砲】、【っちょあの人攻撃当たらないんですけど・・・】（アンサーちゃんあるしね、疾風迅雷も）…

これを機に連合は帝国軍を押していくこととなった
…何故か【紅き翼】のメンバー全員のファンクラブが出来たんだが…
しかも何故か俺のファンクラブ、お姉さま的な人が大半を占めてるし…
何故に…
まぁ多分俺の顔がザックスだからだろうけど……

「……いやぁ…何か色々つかれたな～」
「？何言ってんだ、アルス」
「…何でもないよ、ナギ」
「で、何だよガトウ。俺達をわざわざ本国首都まで呼び出して」
「あって欲しい人物がいる。協力者だ」

そう、俺達は今ガトウに呼び出され、本国に居るのだが…
…何故に俺もいるの？
確かにメンバーだけど…俺べつにいらなくね？つかれてんの！！俺は今日は休みたいのだけど…

「お前がこないと話が進まねぇ。一応、俺達の中で一番強いんだし」

とナギが言ってたけど…今俺弱いよ？身体的な意味で疲れてるし…
未だに戦いって言うのに慣れてないなぁ…仲間にあまり被害がおよばないように…

そんなことを考えているうちに向こうから来たのは…

「「「マ、マクギル元老員議員！？」」」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」
…じゃあこないで欲しいんだけど…紛らわしいし…
で、その方を見て見ると…
何あれ、フードかぶってるけど…

「ウェスペルタティア王国…アリカ姫」
あ―この人ってアリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下だっけか？たしかナギの嫁さんだよな？

「気安く話しかけるな、下衆が」
…うわぁ…綺麗な顔して言うこと酷い…
ラカンは何か気にしてない顔してるけど…
ナギは…何かぼぉーっとしてる？？？何だろう？？？
それ見て何かラカンは笑ってるけど…

話によると彼女は戦争を終わらせる調停役となるはずだったのだが…
力及ばずのため、俺達を頼ってきたというのだ

これに関してもガトウの調査で【完全なる世界】関与しているという話だった

何でも連合と帝国の両方にその関係者が潜んでいるそうだ両方にいるってすげぇな

…面倒なことこの上ないよ…

その後、その組織のことを調べることとなり、ガトウやタカミチ、アルやゼクトは主に調査を担当することになり…

ナギとラカンと詠春はおもに戦闘をし…

俺はというと…

しばらく休みをもらってたりする…

その際ひと悶着あったがだまらせた…

」

休みから帰ってくると…

何でかナギのほっぺに手形がついていた・・・・・??

何でもアリカ姫に叩かれたとか…

何やったんだよ…ナギ…

「ラカン、ナギは何をやったの？」
「お、戻ってきたか。あ～、あいつは女心が分かってねぇからな～」
「？？？？」
訳分からん…
もっと詳しく説明プリーズ？？

それから暫くの間、俺はナギの代わりに戦闘員としてたたかった。
で、何かその間、ナギはアリカ姫に付き合って買い物の付き添いとかしていたそうだ
…大変なんだな、あいつも…まぁがんばナギ…

英雄から犯罪者??

サイド《ガトウ》

「まさか…こんな…」

ガチャ…

「どうしたんだ、ガトウ?」

「ようガトウ、どうしたい深刻そうな顔してよぉ」

今回ラカンはバカンス中、俺は今日は特に何もする気はなかったのでとりあえず少し休もうと思ってたらラカンと合流して…一緒にガトウのところに来たんだけど…

どうしたんだ??

「ああ　ラカンにアルスか、　いや　遂に奴等の真相に迫るファイルを手に入れたんだがな…これがどうも信じがたい内容でな…いや、情報ソースは…確かなんだが…う〜むどうしたものか」

「…つまり、それが信じていいのかそうでないのか…それがはっきりしないってことなのか?」

「いや…そうではないのだが…」

「んだ　ガトウ　ハッキリしねぇな　もっと分かり易く言えや」

…結構分かり易かったような気がするけど？やっぱりバカンだな

「いや、言ってもラカンにゃ興味ない話だよ　多分」

ガトウは一息入れて…

「…それよりこっちの方が深刻だ　この男にも【完全なる世界】との関連の疑いが出てきた…大物だよ」

なになに…！？

「こいつは…」

「現執務官！？」

「このメガロメセンブリアのＮｏ．２までが奴らの手先なのか！？」

「確証はない　外でしゃべるなよ？」

「特にラカン」

「何だよ、しゃべんねぇよ」

しんぱいだ・・・・ラカンばかだからな

すると……

ズズンッ！！！

「「「！？」」」

俺達は外から聞こえた音の方角を見て見ると…
何やら市街地で爆発があったようだ
俺達はかなり遠くの位置にいるため、二人は町の様子を詳しく見えていないが…
俺にはなんとなくわかるなぜかって？
気や魔力だよ・・・・ドラゴン〇ールでもあんだろ気で探るって・・・・それの魔力版だよ

「…（ナギ！？それにアリカ姫も！？何やってるんだ！！）」

それから1日経って…

「…で　貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れ回した挙げ句　その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか！！　どんな夜遊びだそれは！！」

「まあ…後は警察に任せてきたけど」

ナギが詠春に滅茶苦茶怒られていた…どんまいナギ

「敵の下部組織を潰しても意味はないっ！！何のために秘密裏に調査してると…大体万が一王女殿下にお怪我でもあったらどうする気だ！！」

「姫さんノリノリだったぜー？　たのしかったーとかって。相手弱かったしさ、少なくともあの状況で姫さんに怪我なんてないって」

「それに…ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」
ナギがとりだしたのは…執務官の物と思われる手紙…
それが敵の本拠地にあるということは…ガトウの情報は…

「ナギ…グッジョブだな」
「おう！」
「…あ、頭が…」

それからガトウがその証拠を見つけたということをマクギル元老院議員へ連絡を入れるとナギと共にその証拠の品を持ってきてくれと言われ、俺とラカンも一緒に行くことになった

因みにアリカ姫はその前に帝国第三皇女と接触しに行くことになり、既に出発していた

ただ、何故か今度はナギの両頬に手形がついていたが…
またアリカ姫に叩かれたらしい…
ナギ…本当に何したんだよ…てかどんなけ強いびんただよ…

まあそんなこともあったけど…とりあえず俺達はマクギル議員の所に向かった。
何故か俺は嫌な予感がした…ん～～なんかわすれているような…

「マクギル元老院議員」
「御苦労　証拠品はオリジナルだろうね？」
「ハィ…法務官はまだいらっしゃいませんか」
「
法務官は…こられぬこととなった」
「……ハ…？」
「…あれから少し考えたのだがね　せっかくの勝ち戦だ　ここにきて…慌てて水を差すのもどうかと思ってね」
「ハァ」
思い出した…たしかこいつ偽者だ…
「…（ナギ）」
「（何だ…）」
「（あいつ…マクギル議員じゃねぇよ、多分）」
「（奇遇だな、俺もそう思ってた）」
俺達は念話で打ち合わせをし…
そして
「待ちな」
「？」

「あんたマクギル議員じゃねえな　何もんだ？」

ボゥンッ！！
ズシャッ！！

ナギが炎、俺が簡易メドローアを（もちろん威力は魔法の矢程度におさえたが）
似非マクギル議員に向けてはなった

「「な…」」

「ちょーーーーーっ！？ナギおまっ…ア、アルスも…何やってんだよッ」

「元老院議員の頭いきなり燃やしておまっ…それにアルスも腹に矢思いっきり刺して！！」

「…二人とも、良く見て…あいつ偽者だよ。」

「何っ！？」

炎の中から現れたのは…マクギル議員ではなく…少年…

何やら危険なにおいがする…そんな気配を漂わせているナギと変わ

らぬ歳のように見える男の子だった

「…良く分かったね千の呪文の男…それに雷神…こんなに簡単に見破られるとはもう少し研究が必要なようだ」

「…というかバレバレだよ。馬鹿なの？阿呆なの？」
って言っても危なかった」けどな…

「…君は礼儀正しいと情報にはあるのだが？」

「悪党に礼儀なんていらないよ。て言うか情報を鵜呑みにすんなよ。バカンみたいに成るぞ」

「どういうことだぁー！それにラカンだ！バカンじゃねぇ」
ラカンは・・・・無視無視

「…それはいやだね、それに…君は無茶苦茶な魔法を使うんだね…防御しきれないなんて…ていうか穴開いてるんだけど…」

その少年の腹には一つの穴があいていた…

「…まぁ、教えないけどね…（皆、ここは逃げよう…多分、マクギル議員はもう…死んでるよ）」
「…（ああ、だがどうやって？）」
「（まかせて）」

え～っとアル達はどこに…ああ、分かったっと…

何か念話している間に敵がマクギル議員の声使って”俺達”が帝国の”スパイ”だって偽情報流されてるんですけど…うわぁ、更に面倒なことになりそう…うざいなぁ

「よし、みんな集まって…行くよ『ルーラ』！！」

その日を境に…俺達【紅き翼】は帝国からも連合からも狙われる身となったとさめでたし、めでたし

「「「めでたくないわ！！！！」」」

逃亡生活・・・テオちゃんにあいました（前書き）

テオドラとのフラグがたちます・・・・・・

逃亡生活・・・テオちゃんにあいました

その後、【紅き翼】は姫様救出のために『夜の迷宮』へと赴き、アリカ姫ともう一人…助けたのであった。

サイド《【紅き翼】隠れ家》

「何だ　これが噂の【紅き翼】の秘密基地か！どんな所かと思えば…堀立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだこのジャリはよ」

「おいラカン　子供に向かってその言い方は駄目だって。それに相手が相手なんだし」

ヘラス帝国第三皇女　テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア皇女だ

何でもアリカ姫との会談の際に共に幽閉されていて、俺達が助けに行った際についでに助けた皇女様…何だけどさぁ

この子本当に皇女？　第一印象…じゃじゃ馬娘なんだけど…それにエヴァより小さいんだけど…

「何だ貴様　無礼であろう！！貴様！」

「へっへ～ん　生憎　ヘラスの皇族にゃ　貸しはあっても借りはないんでね」

あ…ラカン、皇女様から逃げたよ…

アイツ俺に全部押し付ける気か…くそ…バカンめ

「…初めましてテオドラ皇女殿下」

「…主の名は？」

「俺はアルス・ヴァレンタインと申します」

「何！？　あの【雷神】じゃと！？　…やったのじゃぁ、ファンなのじゃ」

といいながら抱きついてきた…

「うむ、やっぱり本物のほうがかっこいいのぅ・・」

「本物？」と疑問を抱いていると

そうなのじゃと言いながら写真を見せてきた…

「なっ……なぜ写真を…」

「当たり前なのじゃ、妾はアルスのファンクラブ会員ＮＯ１番じゃからな！」

とない胸をはっている

「そうでしたか・・・・・」
するとテオドラ様は
「でな…さ、サインをもらえないじゃろうか？…」と言ってきた
別にへるものでもないので「いいですよ。」といって書いてあげたら
ありがとうなのじゃ、とまた抱きついてきた。
「て、テオドラ様…「テオでいいのじゃ」」と顔を赤らめながらい
ってきた・・・
何この可愛い生物なでたいなどと思っていたら体がかってに動いて
いた
「・・・なでなで」
「……！？＼＼＼＼」
テオは気持ちよさそうに目を細める…
するとアルが
「おやおや、うらやましいですねアルス・・・・知りませんでした
よ貴方もロリk「違う！！」…説得力ありませんねその状況じゃあ
…」
くそ～アルめあいつのロリータ通信燃やしてやる…確かにテオは可
愛いが俺はロリコンじゃない！！
「さーて　姫さん。助けてやったはいいけどこっからは大変だぜ。
連合にも帝国にも…あんたの国にも味方はいねぇ」

「恐れながらも事実です皇女殿下　殿下のオスティアも似たような状況で…最新の調査ではオスティアの上層部が最も「黒い」…という可能性さえ上がっています」

「やはりそうか…」

…状況から判断するとかなり厳しい状況にあることが明確だな

「我が騎士よ」

「だぁら　その「我が騎士」って何だよ　姫さん　クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？　しかも恥ずかしーし」

「もう連合の兵ではないのじゃろ　ならば主はもはや私の物じゃ」

「なッ…」

うわぁ…それって私の物は私の物…お前の物は私の物って言うことですね…

何かアリカ姫ってかなり自分勝手…ドラえも～んここにジャイアンがいるよ～

「帝国に連合…そして我がオスティア　世界すべてが我らの敵という訳じゃな」

…そうですね…

「じゃが…主と主の【紅き翼】は無敵なのじゃろ？」

「世界すべてが敵――良いではないか　こちらの兵はたった８人だが最強の８人じゃ」
…うわぁ、そこまで俺達のことを期待してるんだ…

「ならば我らが世界を救おう　我が騎士　ナギよ　我が盾となり剣となれ」

「…へ　やれやれ　相変わらずおっかねぇ姫さんだぜ　いいぜ　俺の杖と翼　あんたに預けよう」

ナギはアリカ姫に誓いを立てた
カッコいいんだけど…これからのこと考えるとなぁ…

「ふぅ…これからマジで大変なことになりそうだなぁ」

「む、じゃがアルス達は強いのじゃろ？」

…すっかり俺になついてしまいましたね、ひざの上でちょこんっと座って上目づかい…かわいいな

「なでなで」

「ふにゅ～～～…さ、先程ラカンや皆に聞いたのじゃが…アルスが【赤き翼】で最も強いのじゃろ？」

「…はぃ？」

まあたしかに強いけど・・・

「そんなことありませんよ、このメンバー全員が最強なのですよ。テオ…」

これから大変になりそうだな・・・・・・・・

最終決戦（前書き）

ついに最終決戦

最終決戦

サイド《テオドラ》

紅き翼に助けられて
アルスにあったのじゃ…とてもうれしかった。サインももらったしのぉ

やっぱり本物はかっこよくなおかつやさしかったのじゃしばらく一緒にいるとなんかとてつもなく不安になってきたのじゃ

だからもっとアルスの近くで顔を見ておきたい・・・・いつかあえなくなるかもしれない・・・気のせいであってほしいのぉ・・・

サイドアウト

…ふぅ、とりあえず俺達【紅き翼】の反撃は始まった

と言っても闇雲に世界のすべてを敵にしたわけじゃない
アリカ姫やテオドラ、アルを中心としたメンバーが信頼できるものたちと連絡を取り合い、仲間を増やしていく

その間、俺達行動派は敵の本拠地や関係者の場所などを片っ端っから潰していった

暇な時は俺はテオの相手をしていた…なんかテオ
最近べったりだ、こんなことなかったのに・・・
そう言えばナギはかなりアリカ姫と一緒にいる時間が増えてたけど…
うまくいってるってことかな？？？

それから約半年後…

ようやくその戦いに終わりの時が近付いていた

《墓守り人の宮殿》

「不気味なくらいに静かだな　奴ら」
「なめてんだろ　悪の組織なんてそんなもんだ」
「ラカン　油断は禁物だよ　何せ敵方にはあの時あった子供がいるんだから」

「へーへー　お前はいつまでも真面目だねぇ　アルス」
「…ラカンがふざけ過ぎてるだけだと思うけど…やっぱりバカンか（ボソッ」
「ラカンだ！！たく毎回アルスは・・・」
きこえてたか・・・地獄耳だな
まぁ…確かにアルスの言うとおりだな…あの時のやつは今まで一度も現れていない…
なら今回は確実に出てくるだろうな…
「ナギ殿！　帝国・連合　アリアドネー混成部隊　準備完了しました」
「おう　あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる　頼んだぜ」
「ハッ　それで　あの…ナギ殿…アルス殿」
「ん？」
「はい？」
「ササ　サインをお願いできないでしょうか」
「おあ？　ああ　いいぜ　それくらい」
「いいですよ。」
「お、お二人とも　そ、尊敬していました」

セラス総長殿へッと
これでいいかな？
「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

「帝国の正規軍の説得は間に合わん　帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう　決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね　私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ　彼らはもう始めています　「世界を無に帰す儀式」を　世界の鍵「黄昏の姫御子」は今彼等の手にあるのです」

「ああ、そうか」

待ってろよ…姫子ちゃん！！

「ようし野郎ども」

――――いくぞ！！！！

「じゃあ俺から先手を取らせてもらうよ！！」
「おう、任せるぜ　アルス！！」

「始まりは破壊、その後は創造。吾は消滅を司るものなり『メドローア』」
詠唱いらんけど・・・

どかーんという音とともの馬鹿でかいおおな一本の道ができていた・・・

「さぁみんな行こう。」

「おう」
「はい」
「では、いくかのぉ」
「っしゃあ」

この後各自で一対一
俺とナギはフェイトとかいう子どもを相手に戦い…

結果として、俺達は全員立っていた

フェイトはナギに首根っこを掴まれて宙に浮いてるのだが…
何故だろう…
これで終わらない気が…！？たしかここでライフメイカーが！！
「ナギ！！！」
俺はナギに向かって全力で駆け出し…

「なッ！！何を…」
「ちぃッ！！」

ナギをフェイトから引き離すと同時にフェイトの体に何かが貫通していた
もし、俺が少しでも助けるのが遅かったらって思うと…ゾッとするな…

「いかんっ」
ゼクトさんはいち早く状況を理解したのか俺とナギのいる方に最強防護を展開してくれたのだが…

ドッ！！
パキャァァアン
その盾は一瞬にして崩れ去り、ラカンが気合防御を使って防ごうと

もしたのだが…結果はラカンの両腕がなくなり…
俺達は全員その魔法に巻き込まれた

「グッ…バカな…」
「まさか…あれは…」

「…どうやら…敵の親玉のご登場ってわけか」
「あ、アルス…お前…どうして…」

俺以外のメンバーはかなりの深手を負っているのは明確だ・・・・
だが…俺だけはほとんど無傷の状態だったからな

「ふぅ　『疾風迅雷』を使っただけだよ。　まったく　挨拶もなしにどでかい魔力ぶっぱして…これ使ってなかったらしんでたよ。」

「さ、流石…俺達中で一番バグな奴だぜ…」

「…アル、俺があいつの足を止めてる…その間にお前はナギの体の傷を癒してやっていてくれ」

「そ、それは幾らなんでも無茶です！！　いくら貴方でも…」

「アル！！　３０分でも持てば充分だ　やってくれ」

「ですがっ…」

「ふふよかろう　わしも行くぞ　ナギ　アルス　ワシが怪我を負っている面々で一番傷も浅い」

「お師匠…」

「ゼクト！　たった三人では無理です！」

「アル　ここでアイツを止めないと世界は無に帰るんだよ…それだけは　絶対に阻止しないと駄目だ！！　無茶だろうが不可能に近かろうがやらなくちゃ駄目なんだよ！！」

「アルス…」

「ふふ、そのとおりじゃ」

話を終えたと同時にナギの傷も癒えたようだ…
敵も律義に待っていてくれたのだろう…余裕のつもりか？後悔させてやる

「行くぜ！！　お師匠！！　アルス！！」

「うむ　遅れをとる出ないぞ」

だが、俺達三人で掛かってもライフメイカーの優勢は揺ぎ無いもの

だった…

「ちっ！！このままだと世界が…」
「　ナギ…次に俺が確実にあいつを瀕死状態にする…その後確実にしとめろ！」
「…何か考えがあるのか」
「…ああ、ナギ　止めはお前がやってくれ、かくじつにだぞ。それと俺の魔力を少し分けてやる…」そういって俺は魔力をほとんどたした

「…なっ！？いいのか」

「ああ今から使う技は魔力は要らない…だから与えた魔力で全力で止めをさせよ・・・・」

「アルス・・・おぬし・・死ｎ「言うな」ぬぅ」

「じゃあ、逝ってくる。」

そしておれは『疾風迅雷』でライフメイカーの目の前に移動したライフメイカーもそのことに驚いたのか、俺に向かった魔法を放ってくるが…

「ふっ！！！」

魔法を撃つ前にライフメイカーを拘束して呪文詠唱しはじめる…

「我が体、生命に宿りし全ての力よ、我が生命をエネルギーに・・・・・・」

膨大な魔力がうまれる・・・

ライフメイカーが

「ん、なんだこの魔力の量は・・・これでは私でも・・・・」

ナギは

「あいつ、俺に魔力渡したのにまだあんなに・・・・・」

するとゼクトが

「違うぞ、ナギたしかにアルスはお前に魔力を全てわたした・・・・」

「じゃあ、あれはなんだよ・・・！」

「あぁ、あれは多分…自分の生命エネルギーを燃やしておるんじゃ……」

「……なっ！？ッてことは…や、やめろアルス死ぬんじゃねぇ！！」

「ありがとな・・・今までたのしかったよ・・・テオや皆によろしくな・・・アリカ姫と幸せにな・・・」

「じゃあな、また死んだら会おう！自己犠牲呪文『メ・ガ・ン・テ』！！！」

どっかーーーんという音とともに大爆発がおこった。

「あ、アルスぅぅぅぅ！！」

「くっ」

そして煙が晴れていき手足のないライフメイカーが・・・・

そこでゼクトが

「な、ナギやるんじゃ・・・アルスの死を無駄にする出ない！！」

そして

「おおおおおおおっ！！！！」

ナギの魔力を込めた拳がライフメイカーの命を奪った

その後、ライフメイカーのやつ…既に術式を終えていたとかで世界は滅びかけたのだが…

アリカ姫やテオドラ、タカミチやガトウ達が連れてきてくれた部隊が封印を施し…

世界は救われた

そして戦いは終わった・・・一人の英雄によって・・・

最終決戦（後書き）

主人公死んでしまいました・・・・これからどうなるかおたのしみに・・・

終結・・・その後（前書き）

ではどうぞ

終結・・・その後

サイド《ナギ》

俺たちはアルスのおかげでライフメイカーに勝つことができた・・・・。

そしてライフメイカーの術式が完成していていろいろあったが世界はすくわれた・・・

今はみんな怪我の治療などを終えて集まっている

「・・・・・・・・」

「・・・・・・」

皆無言だ。

そこでテオが

「アルスはどうしたんじゃ？どこにおるのじゃ？」と聞いてきた

ほかのメンバーはなんとなくわかっているようだが・・・テオはまだこどもだ無理もない・・

「て、テオドラ・・・・あのな・・」

言うのを渋っていると…

お師匠が

「いい、ナギ、ワシから話そう・・・・・・・」

お師匠は会ったことを全て話した・・・・俺に最後を託したこと・自分の命を使ってライフメイカーを瀕死状態にしたこと・・・・そして笑顔で最後に今までありがとう楽しかったなど死んだらまた会おうなど最後の言葉も・・・・・

さすがにテオドラには厳しかったらしく
「う、うそじゃーー！！」と泣いて部屋に一ヶ月ほどこもってしまった・・・・

ほかのメンバーも涙を流しながら
「笑顔で逝きましたか・・・・アルスらしい・・」とアルが

「死んだらまた会おうか・・・」詠春が

「「・・・・・」」アリカとガトウは無言だ

ラカンが
「あいつは死ぬとき笑顔だったんだろ、だったら俺たちも湿っぽいことはなしにしようや・・」
などとらしくないことをいってきた

「「「「そうだな！！」」」」
とみんな無理している奴もいるが笑顔になった。」

そのあとアリカが捕まったりそれを助けて
みんなで旧世界の詠春の故郷である京都へと旅行に行ったりした

そこでもリョウメンスクナという鬼神が復活するなどのイベントがあったが

ライフメイカーに比べたら雑魚なのでそのままま封印した。
そしてそこで皆バラバラに分かれた。

サイドアウト

サイド《アルス》

アルスは真っ白い空間の中で目が覚めた・・・・・・
「ん・・・・ここはどこだ??」

すると
「今度は世界すくっちゃうなんてね。」

「おかえり・・」

と声がうしろから聞こえてきた
そして振り返ってみると最初に出会った神様がいた!?

「そっか・・・そういや俺死んだんだっけなあ・・あいつら無事かな?」

神様が
「無事よ、ちゃんと世界も救われたわ」

「そうか・・それはよかった。」

「で俺はこれからどうなるんですか？」

「貴方はこれから神になってもらいます。」

「……えっ！？紙ですか？」

ぺらぺらの紙になるのか・・・一回転生しているからしかたないのか？

「違う。」

「違うわよ！！その”紙”じゃなくて”神”。ｇｏｔよｇｏｔ。」

ん・・・神だと？ｇｏｔ？んん？

「えっ神ですか？何でいきなり・・・それに俺が神になれるのですか？」

「なれるわよ・・・実はね、貴方は転生する前から神になれるほどの器があったの・・それでほんとに神になる器があるかどうか転生させて試したってわけなのよ。・・・ごめんね・・・」

「そうでしたか・・・・まあいいですよ。で俺に神になるほどの器はあったのですか？」

「もちろん。あるわよだからさっき言ったじゃない神になってもらうって」

「そうでしたね・・・でどうすればいいんですか？」

「今から神になる試験をうけてもらうわ、何年かかるかはわからな

い・・・1年～～～100年もしかしたらもっとかかるかも・・・・
」

「ちなみに貴女たちはなんねんくらいで？」

「50年。」

「私も50年だわ。ちなみに最高神は20年よ
早いと早いほど力の強い神になれるわ・・・いわば才能よ・・あな
たは十分ある。私たちと同じくらいかしらね」

「そうですか・・・わかりました。」

「ではいってらっしゃい。がんばってね」

「ばいばい、がんばって。」

「はい、いってきます。」

そして俺は神になるための試験を受けた・・・・

サイドアウト

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・

・・・・

・・

・

「あのこは何年かかるかしらね？」

「最低でも私たちとおなじくらい。」

「そお・・・まぁあのこ才能はすごくあるわねたしかに」

サイド《アルス》

あれから１５年ほどの月日がたった。すると突然

「これで神の試練を終わります」と頭のなかで聞こえた

「レベル・・・・最高神、最高神」

「まじかよ・・・・よりにもよって最高神。あの二人こえちゃった
よ・・・・（汗）」

レベルがわかると俺の体が透けていった・・・

サイドアウト

「ふぅ～あのこが試験に行ってもう１５ねんかぁもうすこしかかるかな？」

「さすがにまだ早い・・いまだと最高神こえる。」

そうよね・・・さすがにまだよね・・・・・終わったらすごいなんてもんじゃないわ。

などと会話していると突然、周りがまばゆい光を発した！

「　　！？　　」

なに？どうしたの？

すると光が晴れていき見たことのある顔が見えてきた・・・・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・」

なんか口をぽかんとあけてぼーぜんとしているふたりに

「え・・・・っと、ただいま」

といったら

神様が

「え、えぇぇぇーーーーは、はやすぎるわ！！！！」

「早い！！！」
とおどろいている
あたりまえか・・・だって15年だし現最高神超えちゃったし・・・
なんかもうごめんなさい・・・

またまた、ネギまのせかいへ・・・（汗）（前書き）

テオと再会！！！

またまた、ネギまのせかいへ・・・・（汗）

神になる試験がおわり元の場所に帰ってくると・・・・

神様二人は驚いていた・・・

「すごいわね才能があると思っていたけどここまでとはね」

「・・・でおれはこのままどうするんですか？あんまり神になったこと実感ないんですけど・・・・」

すると突然

「あたりまえじゃよ・・まだ真に神になれたわけじゃなんんじゃからのぅ」

と声が聞こえた・・

そしたら二人が

「お父さん！！」

「父様。」

といった

「？？？？？」

「紹介するわ・・・私たちの父である現最高神のゼウスよ」

「ゼウスじゃよろしくのぅ」

「ちなみにわたしはアテネよ」

「アルト。」

「そういえば初めて名前聞いたな・・で真に神になるにはどうしたら？」

「それはのぅ・・・また現世に行ってまた世界を救ってくるのじゃ」

「わかりました。でどこに？？」

「また、ネギまじゃまたあそこでなにかが起こる・・・なのでそこでいいじゃろ・・おぬしのためにもな」

「でも、俺死んでますよ・・・」

「そこは大丈夫じゃおぬしは受け入れてもらえる別に神になったことはいてもえぇし・・・じゃが力はあんまり使ってはいかんぞ強大すぎるからな
使っても死ぬ前くらいに抑えるのじゃぞ！！」

「わかりました。では行ってきます。」

「恐ろしい才能じゃの、まぁあの子は大丈夫じゃろいずれわしの後を告ぐ存在じゃしのぅ」

「そうね、お父さん」

「そう、父様」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

・・・・・・
・・・
・・
・

サイド《テオドラ》

アルスが死んでからもう１５年もの月日がたった・・・・
最初は信じられなかったのじゃがいくら待っていてもアルスは帰ってこんかった・・・・
そしたら１０年前ナギも死んだといううわさがながれた・・・・多分無事じゃ労ろうけど
たまにラカンの筋肉バカが遊びに来てくれるこれが唯一の楽しみじゃもう書類ばっかりはいやじゃ
と外に出て夜空を眺めていると突然光が・・・・
まぶしいのじゃぁ

サイドアウト

サイド《アルス》

・・・・・・とここはどこだ??辺りを見回すと一人の少女がいた・・・

どこかでみたことあるような・・・?

とりあえず聞いてみよう

「すいません、ここはどのですか?」

ときくと

「ん、?何じゃおぬしここは・・・・・!?」

あ、あれは・・・アルス!?アルスじゃないかのぉ

夢か・・幻か?

「あのぉ・・・・・すいません」

やっぱりアルスじゃ・・・アルスなのじゃ

妄は無我夢中で駆け寄った・・・・

なんか、少女が「アルスぅぅぅ」などと俺の名前を言いながら胸に飛び込んできた・・・

「ん・・・・・もしかしてテオかい?テオドラかい?」

「そうじゃ・・・テオドラじゃ・・・今までどこにいっとたんじゃ・妾がどれだけ心配・・・した・・と・うわぁぁぁぁん」といきなり泣いてしまった

こまったな・・・テオはこのあと小一時間ないた・・・

「もう大丈夫かいテオ？」

「大丈夫じゃ・・今までどこに行っていたかおしえてもらうからのぅ！！」

「わかったよテオだからそんなに怒らないで・・・・」といって頭を撫でる

「なでなで」

「・・・・・・＼＼＼＼＼」

やっぱりアルスに撫でてもらうのはいいのぅ・・・・＼＼＼

「実はね・・・・・・・・・・・・・・・という事なんだごめんね」

アルスは黙々と話してくれた・・・自分はもともと転生者でなんか本当に神になれる器があるか確認するために神にこちら

この世界に送られたらしい・・・・アルスは知らなかったらしいが

それで大戦でしんでしまってまた神様の元へ行っていたらしい・・・・・・

そこで神になる試験とやらをやってきたらしいんじゃ

なんか思ったより早く試験が終わって下界のことをもっと良く知って来いということで
また生き返ったらしい
信じられない話じゃが本人が目の前にいるのじゃしんじよう・・・・
・

「そうなのか・・・わかったのじゃ」
よかった・・・なんとか信じてもらえたようだ・・・・最後のほうは嘘だがなこればっかりはほんとはこの世界でまた何か起こるから救いに着たなんて
いったら混乱するもんな・・

そして今日はテオの部屋に泊めてもらった・・・
そのときテオがいっしょに寝るのじゃなどと言ってきたが
「ダメだ・・」
というと

「いやなのかのぅ・・・」と涙目・上目使いでいってきた・・・

「ぐはっ・・・」
アルスに９９９９のダメージ
「ぐっ……しかたな「アルス！大好きなのじゃ」ん、じゃあ寝ようか。」
そして一緒に眠った・・・・なにもしてないよ・・・ほんとだよ・・
・

次の日の朝ふと目を覚ますとテオが抱きついてねていた・・・

そしてテオも「う…ん」と起きたので

「おはよう、テオ」と言ってテオの額に軽くキスをした・・・

「んっ・・・・お、おはようなのじゃ＼＼＼＼＼」

と顔を赤らめていってきた

そして1年くらいの月日がたった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・

・・・・

・・

・

そろそろ麻帆良にいかなくちゃな・・・

原作道理だとあそこにエヴァがいるんだよな・・・・・・・

どうしてるかな?

会いに行かないと

この1年間でテオとたくさん過ごした、そしてたくさん遊んだ。

そのときラカンが遊びに来てびっくりしていた・・・・

そしてテオに話したことをそのままはなしたすると

「久しぶりに戦おうぜ」などといってきた・・・筋肉ばかはかわりなくてよかったよ・・・・

まぁ戦いましたよもちろん圧勝！！一様神だからね。負けはしないよ・・

まあこんなことなどもあって

テオに

「旧世界の麻帆良に行こうかと思う……」というと

もちろんのこと

「ダメじゃ、ダメじゃダメじゃダメじゃいってはいかんずっと一緒にいるんじゃ！！」

と・・・・

「大丈夫だよちょこちょこ帰ってくるからさ・・・・・」

「じゃあ・・・・妾とか、仮契約するのじゃ・・・・（ぼそ」

「ん?、何をするって?」

もちろん聞こえているさ・・・ふふ

「…＼＼＼仮契約じゃ！！！」

「ん、わかったよ」

そして俺は仮契約をしてから麻帆良にむかった

そのときテオに「絶対帰ってくるのじゃぞ！」と注意を受けた・・・

・・・

良し、麻帆良にむかいますか・・・

俺は麻帆良にむかった。

またまた、ネギまのせかいへ・・・（汗）（後書き）

次はまほらです・・・

麻帆良前ステータス（前書き）

読んでもそんなにかわらないよ

麻帆良前ステータス

・名前　アルス・ヴァレンタイン
・性別　おとこ
・年齢　１８歳　１８５センチ　７５キロ
・容姿　ＦＦ７のザックスって感じ

身体能力＆魔力・気（初期値）

・魔力　ナギと同じ位
・気　ラカンと同じ位
・身体能力　ラカン・ナギ位

神様からもらったチ・カ・ラ

・複写眼（暴走はしない・視力は５．０）
・アンサートーカー
・限界突破（ＤＢのサイヤ人的な）
・不老（不死ではない・何歳にでもなれる）
・マンガ・アニメなどの技

アニメなどの技

Ｈ×Ｈのキ〇アの電光石火・疾風迅雷を使う・・・・もちろんネギが使う闇の魔法の疾風迅雷とは違います。ＤＱ・ＦＦシリーズからも数多く出します

魔法始動キー
ラスト・マイ・マジック・マテリアル

麻帆良時のステータス

・名前　アルス・ヴァレンタイン
・性別　おとこ
・年齢　１４歳（大戦時と同じ見た目ではまずいので・・・・・）
・容姿　少年のザックス？イメージしにくいかもしれませんが・・・

一応神になったが能力は封印中・・・ちなみに何でもできます
創造の力とか使うと思う・・・・・

その他は今までと同じ方向で・・・・・設定いろいろ変わるかも・・・
気にしたら負けです。」

麻帆良前ステータス（後書き）

ていう設定で

この先どうやってすすめていこうかな・・・・・？？

麻帆良に到着！！（前書き）

やっぱり駄文です・・・

麻帆良に到着！！

サイド《アルス》

とうちゃ～～～～～く！！！

はい、というわけで今現在俺ことアルス・ヴァレンタインは麻帆良に居ます。周りはもう真っ暗です。はい、そうです夜なんです・・・・・・着く時間まちがえた・・・・・・・あぅ

あっちなみに現在の容姿は１４歳ってところかな・・・大人ヴァージョンは一応死人だしね・・・・まあすぐ魔法関係者にはバラすとおもうけどさ・・・・・・

っともうこんなところでいいかな??

ん～～～！?あそこで誰か戦っていないか??しかもピンチっぽいぞ?助けに行きますか・・・・・・

サイドアウト――――――――――――――――――――――――――――――

サイド《?????》

私は今鬼と戦っている・・・
「刹那！！大丈夫か??」

「っく、数が多い・・・・何とかしないと・・・・」
ん～～今回は鬼の数が報告とぜんぜん違うな・・・・これは報酬を多くもらわないとね・・・・・
すると刹那が油断して鬼に・・・・・・

「刹那！！油断するな！？・・・・後ろだ・・・・」
もう間に合わないと思ったら・・・・・
鬼が急にぶっ飛んでいった・・・・そして
「大丈夫か??」
と私たちと同じくらいの少年が現れた・・・・

サイドアウト
―――――――――――――――――――――

サイド《アルス》

鬼が居るところに向かっていると一人の少女が油断して後ろから鬼が攻撃しているところだったので
とりあえず鬼をぶっ飛ばして大丈夫か?と声をかけた・・・

「大丈夫か??」

「あぁ、ありがとう・・それより貴方は??」

「それは、残りの鬼たちを倒してからってことで・・・・君は休ん

でていいよ・・・」

そういって俺は鬼共を倒していった・・

「お前何者だ・・・邪魔するならお前も殺す・・」

そして鬼共５０匹くらいが襲い掛かってきた・・・

「おぉ～こわいこわい・・・まぁ元のところに返りなって・・」

そして俺はハーディスを取り出して鬼どもをけしさった

そして少女のほうに振り返ると警戒していた・・・

「貴様！…何者だ…」

と聞いてきた・・・

「ん～～助けてあげたのになぁ～～～

そこの木に隠れてるお嬢さんもきなよ・・」

すると

「ふぅ～良くわかったね…少なくても１００ｍは離れていたのに…」

「あたりまえだよ。二人で戦ってたのはしってたからね。」

「ところで貴方は何者なんだい？」

「ん～～貴方たちを助けた人じゃダメかな？？」

「貴様！！ふざけるなよ！！」

「刹那、いいんだよ助けてもらったことには変わらないんだから・・・
それと貴方には少し着いてきてほしいところがある・・・この学園の最高責任者のところだ・・いいかい？」
と聞いてきた・・・・よしこれで原作入りは出エ来たカナ？？

「…わかった。つれてってくれ」
そういうとどこかに電話した。

「よし、それじゃあ着いてきてくれ・・・刹那はどうする・・・」
「いくに決まっているだろう！」

サイドアウト

サイド《学園長》

龍宮君から連絡があった。
そこで助けてもらったという話を聞いたどうやらその人物をつれてくるようだ・・・・
「いったい何者かのぅ・・タカミチ君もよんどくかのぉ。」

サイドアウト

あれから時間がたって俺は今学園の最高責任者・・・学園長もとい

ぬらりひょんの目の前に居る。

「なにか、失礼なことを考えておらんかのぅ？ところで君は何者じゃ？君のような魔法生徒はしらんのじゃが・・・・・ちなみに鷲はこの学園の
学園長をしておる近衛右衛門じゃ」

「僕はタカミチ・T・高畑だよ」
というかタカミチふけたな・・・

「さっきはどうも・・・龍宮真名だ」

「桜咲刹那だ！」

「貴方たちが自己紹介して俺がしないわけには行かないな・・・ん～言ってしまうと混乱してしまいそうだしな～学園長さん・・あまり聞かれたくないのでその二人に席はずしてもらっても？？」

「…わかった。龍宮君・桜咲君…」

「わかりました…それでは…」
よしでていったか…
「これでいいじゃろ」

「あぁ、ありがとう。ところでアルいるんだろでてこいよ・・・」

「ふぉ！？」
なんでわかったのじゃ？？相当な実力者じゃのぅ
それに名前まで・・・

「ふぅ…まさか…きずかれるとは……私は貴方を知りませんが貴方は私をしっているようですね??何者ですか?」

「わからないのか?そんなに面影ないかな14歳の体って??・・・・・俺だよ…学園長はともかくアルとタカミチはあったことがあるのにな・・・」

二人ともわからないって顔してるな

「ほ、ほんとにあったことあるかい?わからないんだが?」

「私もわかりませんね」

「はぁ、仕方ないか…15，6年ぶりでしかも俺は一応死人扱いだからな…俺だよアルス・ヴァレンタインだよ」

と言ってもとの体に戻る

「「「……!?」」」

三人とも驚いてる…あたりまえか

「アルスさん!?」

「ふふ、アルスでしたか…確か貴方は大戦時体を張って死んだはずですが?どういうことです」

「そうですよ!アルスさん説明してください。」

「まぁ、落ち着けタカミチ・・・・・

ったと説明した・・・・・・うん、嘘はあまり言ってないはず

「「・・・・」」

沈黙はいたいのだが

「信じられないですね。」

「貴方はバグキャラでしたからね。なにがあっても不思議じゃないでしょう。」

「まぁ、いいじゃないか現にこうして生きているんだしちなみに14歳の体はな…一応死人扱いだからなカモフラだ」

という風に話を楽しくしていると・・・

「…鷲を無視しんでくれ…」

「「「…あっ」」」

「タカミチ君までひどい…鷲泣いちゃうぞ。」

「すみません。」

「で、そんな英雄殿がなぜ真帆良に?」

「えっとなここに”闇の福音”って居るだろ…昔一緒に旅をしていたんだ…でここに居るって聞いたから会いにきたわけさ」

「ふぉ、そうじゃったか確かにおるぞい・・・・ところでアルス君はここの生徒になってみないかね?」

「ん？別になってもいいぞ」

「やっぱり無ｒっていまなんと？」

「いいっていったんだよ」

「ふぉ、てっきりことわるかと…それじゃあ明日朝７時にまたきてくれるかの」

「わかった。アル今日お前の家泊めてくれ。」

「はい、いいですよでは行きましょうか・・・」

転移魔法でいってしまった。

「タカミチ君、アルス君はどういう人なのかのぅ？」

「とても、いいひとですよ。アルスさんはとても強くてやさしいですし、仲間を大切にしてくれました。今は生きてるみたいですが大戦時は世界のために自分の命捨ててまで世界救いましたからね。死ぬときなんか笑顔だったらしいです。」

「ふむ、そうかの……この結果が吉と出るか凶とでるかじゃな…ネギ君のこともおねがいできるかのぅ・・・・」

こうして原作に介入することができましたっと

2ーAに入ります

アルの家に泊まって次の日の7時
今学園長室の前に居る。

コンコン

俺は学園長室の扉を叩く

『開いておる』

ここはいつも開いているのではないだろうか？

そう思いながら入る

ガチャッ

「失礼します」

今日もタカミチがいる

「おはようアルスさん」
「おはよう、タカミチ…それと俺はここの生徒になるんだからタメ口でいいぞ」

挨拶は基本だからするよ

「おはようございます。今日も頭が凄いですね」

「そうじゃろそうじゃろ」
別に褒めて無いんだが・・・（汗）
「それで俺はどこのクラスに入るんだ??」
「それはじゃな…女子中の二年Ａ組じゃ」
「この爺さん頭大丈夫か?ボケ始めているな・・・」
「いやいや、わしは正常じゃよ、ボケてもない。」
「なっ、心を読まれた…」
「口にでてましたよアルスさん」
む、そうか…
「で、俺は男なんだが」
「それは、共学化のためのテストということでいいじゃろそれとお主には頼みたいことがあってやりやすいように２－Ａにしたんじゃ」
頼みというのは護衛だった。
護衛の件で話を聞いたが
学園長の孫である
『近衛　木乃香』は
とてつもない魔力を持っている為にそれを利用しようとする者がいるらしい
本人には魔法について何も知らないので守ってほしいそうです

まぁ知っているけどな…

「なるほど、了解した。」

「これが、男子用の制服じゃよ。もうすぐ担当の先生が『コンコン』…来たようじゃな」

「失礼します。」

「ふぉ、アルス君今日から君のクラスの担当のネギ君じゃ。でネギ君今日から君のクラスに転入するアルス君じゃ」

「よろしくお願いします。ネギ・スプリングフィールドです。」

「アルス・ヴァレンタインです。今日からよろしくネギ先生」

「はい、よろしくお願いします。」

「じゃあネギ君案内たのむぞぃ」

「わかりました。では行きましょうアルスさん」

「ん…じゃいこうか」

すると念話で

「（今夜9時に世界樹の広場に来てほしいんじゃが…）」

「（わかった。顔合わせだろ。）」

「（そうじゃ、よろしくの）」

～廊下～

「ネギ先生。どんなクラスなんだい？」

「そうですね。元気が有っていいクラスですよ。」

そして着きました

二年Ａ組！

中から声がする

騒がしいな

定番の黒板消しまであるし

「ではアルスさんはここで待っててください中で呼びますから」

ネギ先生は扉を開けて

落ちてきた黒板消しを受け止め足元に張ってあるロープを飛び越え

吸盤付きの矢をよけた

『おお～』

『はい、みんな席に着いて、出席をとります』

『はーい』

『えー。今日から新しくこのクラスにはいる人がいます。入って来て下さい』

呼ばれたわ…

ガラガラ

俺は扉を開けた入るが
足元にあるロープに躓いた
すると上からバケツが落ちてくるが床に手を付いて倒立踵蹴りを決める

「ふぅー危ない危ない」

そして俺はバンッ！　と教卓を叩く。

「世界は平凡か？　未来は退屈か？　現実は適当か？　安心しろ。それでも、生きることは劇的だ！」

某生徒会長の言葉をリスペクト。

「ということで今日からこのｋ・・・・？？」

「「「「……か、」」」」

このパターンはまさか！

俺は耳を塞ぐが

「「「「格好いいーーー！！」」」」

バインドボイスゥゥゥ！

俺、高級耳栓付いてないから

窓にヒビが入るとかどんだけだよ。元気が有り余りすぎの間違いですよね

「どこから来ましたか？」

「彼女いる？」

「歳はいくつなの？」

「勝負するアル！」

・・・・・　オイ

最後のはなんだ！

あ、刹那と真名がいる

「それではアルスさん。自己紹介をよろしくお願いします。」

「えー。今日からこのクラスにはいるアルス・ヴァレンタインです。アルスで構いません」

このクラスはやっぱ異常な気がする

中学生体型じゃない奴や
小学生とかいるし
留学生が多いうえ
ロボットに幽霊がいる
てかエヴァが驚いている・・「同姓同名か??」とか「あいつはもう居ないもんな」とか言っている・・・すまんエヴァあとで会いに行きます。

「それじゃ、一時間目を少しだけ、アルスさんへ質問にしたいと思います」

「えー、それじゃあ質問は朝倉さんに任せます」

「早速質問させてもらうよ。初めに身長と体重、年齢に趣味や特技を教えて下さい」

「身長も体重は最近測ってないからわからんが。歳は１４だ。趣味は料理・音楽だ。」

「次の質問。黒髪なのになんで日本の名前じゃないんですか?」

「ハーフなんだよ」

「最後の質問。ズバリ!このクラスで気になる人は?」

うわっ!
みんな一斉にこっち見たよ
てか、刹那がさっきから凄い睨んできてるし昨日のことかな

ひとまず答えるか

「そうだなー。好意を持ってくれるのは嫌ではないな。え～～～っとじゃあ・・・・相坂さよ　絡繰茶々丸　超鈴音　長谷川千雨　大河内アキラエヴァンジェリンさん…とこの辺かな」

言ったそばから「見えるんですか！？　見えてますよね！！」と俺の周りを飛び始める相坂さよ。

ええい、後で相手してやるからじゃまだ・・・

「えっとじゃあ席は…エヴァンジェリンさんのとなりで」

「よろしく、エヴァンジェリンさん。」

そして昼放課になり

こちらを茫然と見つめている相坂さんを手招きして呼ぶ。

意図はすぐに通じてゆっくり話せるように屋上へと向かう。

屋上へと続く扉を開ける。

しかし誰か来るとも限らないので人払いの結界を張る。

これで漸くゆっくり話せる環境が整った。

「じゃ、改めて。アルス・ヴァレンタインだ。アルスでいい」

「あ、初めまして。相坂さよです。私のこともさよって呼んでください。って、やっぱり見えてるんですよね！！」

今更な質問だなぁ。

「ちゃんと見えてるし聞こえてるよ」

「今までどんなお払い師や霊能者にも見えなかったのに」

心外な。その辺の三流と俺を一緒にしないでもらいたい。一応神だし

「まぁね。ちなみに何年ぐらい幽霊やってるの？」

「えっと、六十年程」

「はあ！？」

思わず声を上げてしまった。もう原作の細かいところまでは覚えてないし、何より六十年て。

それ悪霊化も成仏もせず在り続けるって。

「や、やっぱり私ってダメな幽霊ですよね」

「いや、ダメって言うよりすごいと思うよ。むしろダメな幽霊って何さ？」

と、話を聞くと、なんでも存在感が無くて誰にも気付いてもらえなかったり、怖がりで夜の学校に耐えられなくて最近はコンビニやファミレスで過ごしているらしい。

そして、さよちゃんにとっては六十年ぶりの世間話を楽しむ。六十

年も幽霊やってるからか魔法使いのことは少し知ってたよ。

俺のことも軽く話してその場をあとにした…。

そして俺のために歓迎会をした皆と仲良くなりました・・・・

今度は世界樹にいかなくてはな・・・

2―Aに入ります（後書き）

歓迎会書きませんでした

世界樹で顔合わせ（前書き）

です・・・・・

世界樹で顔合わせ

サイド《エヴァ》

今日爺が新しい警備員が入ったということで
魔法関係者の先生・生徒を世界樹広場に9時集合とのことだ…
私はどんなやつが来るか興味があったので行くことにした……

しばらく待っていると

「来たようじゃな」
どうやらきたようだ…ん？あいつは今日うちのクラスに入ったやつじゃないか…たしかアルスとかいったなあいつと同姓同名だ……
あいつとは昔１００年くらい一緒に旅をしていたやつのことだ…あいつは私から離れて魔法世界に行ってしまった……
しばらくするとアルスが戦争中戦死したと言ううわさが流れてきた…
私は信じることができなかった…あいつはバグキャラだったからなそして私は詳細を知るためにアルスと一緒に戦っていた英雄ナギ・スプリングフィールドにあって問い詰めた…

エヴァ過去〜〜〜
「ついに見つけたぞ【千の呪文の男】。この極東の島国でな」

【雷神】アルス・ヴァレンタインが死んだとうわさが着てから5年。
あれから私はアルスの情報を探し続けた。
本当のことが知りたかった。
もう一度会いたかった。

もう一度話したかった。

唯一私を怖がらず、【闇の福音】や【真祖の吸血鬼】などと見ずにエヴァンジェリン・A・K・マグダウェル個人として見れくれたのは彼だけだった。

「今日こそ……今日こそは！」

そうして探し続けたが手掛かりは一向に見つからない。
それに私自身の悪名もある為、大っぴらに探すことは困難だった。
なので私が思いついた方法は一つ。
アルスの仲間――“紅き翼”のメンバーを探し出し、アルスの情報を吐かせること。
そして今日、やっと紅き翼のメンバーを見つけ出した。

「【人形使い】【闇の福音】【不死の魔法使い】エヴァンジェリン……恐るべき吸血鬼よ。己が力と美貌を糧に何百人を毒牙にかけた？　その上俺を狙い、何を企むは知らぬが……」

こいつもか……
紅き翼のメンバーなら、と思っていたがやはりこいつも私を見てくれない。

「……諦めろ。お前では俺には勝てんぞ」
「うるさい！　パートナーのいない魔法使いに何が出来る！？　行くぞチャチャゼロ！」
「アイサー御主人」

絶対に今日こそアルスの情報を手に入れる！

そしてもう一度会うんだ！

「え～とこの辺だっけ……」

「フ……遅いわ若造！　私の勝ちだ！」

後一メートル。

これさえ通れば！

ズボッ！

へ？

「うわぁっ！？」

何だこれは！？

「なっ……これは！？」

「落トシ穴ダ、御主人」

「見りゃわかるッ！」

何でこんなものをっ！？

「ふはははは！」

「ひっ…ひぃぃぃぃぃ！？　私の嫌いなニンニクやネギ！？　いっ…いやあ～っ、や、やめろぉ～っ！」

「フフ……お前の苦手なものはすでに調査済みよ。最近何か嗅ぎまわっていたようだからな」

「オチツケ御主人！」

「あぅぅっ」

「アアッ、御主人ノ幻術が解ケタ！」

何なんだ、こいつは！
ていうかこいつは恥ずかしくないのか！？

「ひっ……卑怯者ーーッ！　き、貴様は【千の呪文の男】だろ！？
魔法使いなら魔法で勝負しろーーっ！」
「やなこった。俺は本当は5，6個しか魔法知らねーんだよ。魔法学校も中退だ、恐れ入ったかコラ。てか何で俺を追っていたんだ？」
「今頃聞くのか！？」

そういうのは最初に聞くものじゃないのか？

「……【雷神】の情報が欲しかったんだ」
「……アルスの情報…　また何で」
「うぅぅ……」

言わないと駄目なのか？
いや、もしかしたら教えてくれるかも知れないし。
でも恥ずかしい……

「……あいつに会いたい。もう一度話がしたい。本当に死んでしまったのかも知りたいんだ…」
「……」

なんか苦い顔をしてるな…？
おかしいのか？

「……アイツ…に会ったことがあるのか？」
「……しばらく旅をしていたことがあるんだ。魔法使いどもに殺されそうになったところを助けてもらった」

「……それだけでアイツに会いたいのか？」
「違う！」
そんなことじゃない！
あいつは！　あいつは！
「あいつは唯一私を怖がらないでくれた！　私を【真祖の吸血鬼】だからと言って殺そうともしないで、ただのエヴァンジェリン・A・K・マグダウェルとして見てくれた！」
「……あいつらしいな」
眼の前の赤毛の魔法使いは笑っている。
何か懐かしいものを思い出すかのように。
「すまないな…あいつはほんとに死んだよ…俺たちが弱いばっかりに自分ろ犠牲にしてな…」
「なっ・・・・」
その事実を聞いた私は心の中で何かが無くなった感覚にとらわれて何も考えられなくなった…そしていつの間にか登校地獄の呪いをかけられていた・・・
過去終了～～～

などと思い出していると爺が紹介し始めた…
「では、皆に紹介しようかの。紅き翼の一人である『雷神』のアルス・ヴァレンタインじゃ。」

「アルス・ヴァレンタインだ。まぁよろしくな。」

周りがざわざわする。具体的には、「あの紅き翼の?!」とか「死んだはずじゃ・・・・」「まさか偽者」とかだった
当たり前だろ死んだはずの人物がここに居るんだし年齢からしても違う…
すると
「いやいや、本物じゃよ・・・アルス君もとの姿に戻ってくれんかの・・・」
などと言い出したまさか本当に・・・
「あぁ、わかった。仕方ないこの際事情を話すよ…じゃこの姿で…」
そういって私の知っているアルスになった…私は無我夢中で駆け寄った…
茶々丸が「マスター」とか言ってるがどうでもいい

サイドアウト

サイド《アルス》

俺が元の姿に戻ると突然「アルスぅぅ」という言葉が聞こえてきた…その方向を見てみるとエヴァだった。そしてそのまま腹に突っ込んできた…なんか前もこんなことあったような・・・??

「アルス!!アルスなのか!?」

「あぁそうだよエヴァ…そのブレスレットまだ持っていてくれたんだね。」

「当たり前だ!?これは唯一お前がくれたものだからな…それより心配したんだぞ!?今まだどこに行ってた…教えてもらうぞ」と泣きながら行ってきた

「ごめんな…ちゃんと教えるから…泣き止んでくれ…」

「だってぇ心配したんだぞ…もうあえないと…おもってた」

予想以上にくずるので、抱っこしてみる。

「あぅ……///////」

「泣きやんだか……」

その分なんか顔を赤くしてるけど。

ま、気にしなくていいだろ。

「ふぉっふぉっふぉ。そんなエヴァは初めて見るのぉ」
「で、学園長顔合わせは終了か??」
「実力を測りたくてのう。タカミチ君と戦ってもらえるかの?」
「あぁ、わかった。」
そういって泣き止んだエヴァをおろした…
周りにいた俺とタカミチ以外の人は離れていく
「貴方と手合わせするのは久しぶりですね。」
「紅き翼にいた頃以来だな。」
「では、行きますよ。」

タカミチがポケットに手を入れて構える。
それに対してアルスはタカミチと同じ構えを見せている。
「アルスさん、どうして僕と同じ構えで来るんですか?」
タカミチがわずかに動揺しながら聞いてくる。

「あぁ、少し事情があってなあまり魔法は使いたくないんだ。これじゃ不満か？」

「いえ、どんな形にせよ貴方に僕の全力を出せることには変わりありませんから。」

「そうか、じゃあ・・・・」

パァン！

アルスとタカミチの間に乾いた音が鳴った。

「へぇ？これに反応できるか。」

「僕だって成長してるんですよ。」

パパパパパパパ！

アルスとタカミチの間で見えない何かが衝突しあっている。

それはどんどん速く、そして確実に多くなっている。

まるでマシンガンを打ち鳴らしているような爆音が夜の街に響いていく。

タカミチの顔を見ると苦しそうにしているが、それに対してアルスは涼しい顔で居合い拳を放っている。

パァン！

とアルスの放った一発の居合い拳がタカミチの顔に直撃した。

「あててててて、やっぱり全然威力が違いますね。」

「まぁそれは仕方が無いさ。錬度が違うからな。」

直撃したところをさすりながら立ち上がるタカミチ。その手には魔力と気。

「そろそろ本気で行きます。」

その手を合わせて咸卦法を使う。アルスはそれを見て笑う。

「おぅ、それを使えるようになったか。じゃあ俺も全力で居合い拳を打つよ。」

ドォン！とまるで大砲を撃ったような轟音が響きまた、アルスとタカミチの間で衝突する。

ふと、アルスがタカミチのほうを見るとそこにタカミチはいなかった。

背後に殺気を感じ横に飛ぶ。

一瞬後、アルスのいたところに豪殺・居合い拳が打ち下ろされる。

「あぶなッ。」
「嘘つかないでくださいよっと！」
容赦なく放たれる豪殺・居合い拳を全力の居合い拳で打ち消し、飄々とよける。
と、さっきまで動いていたアルスが止まり、タカミチも技を放つのを止める。

「いや～～、想像以上に成長したな。ガトウ超えたんじゃないか？？」
「これでも、鍛錬は欠かしてませんから。というより僕の咸卦法の居合い拳を普通の居合い拳で打ち消せる貴方が以上だと思いますけど・・・。」
「まぁ、これでも大戦時紅き翼の一人として戦ってたからな。その中でも最強と自負しているよで、お前の力はわかった。その力に対して俺も魔法使うの嫌だが【雷神】の技で迎えよう。」
そういって向き直るアルス。【雷神】という単語に対して警戒を強くするタカミチ。
だが意味が無い…
「じゃあ行くぞ…
百重千重と重なりて　走れよ稲妻！『千の雷』そして『疾風迅雷』」

と唱えるとタカミチは反撃する前に倒された

「いててて、やっぱかないませんね。何されたかわかりませんでしたよ。」

「これでいいのか？学園長？」

「うむ、いいぞいでは解散じゃ」

「じゃ帰るか…そうだエヴァ今日泊めてくれないか？？」

「ん、いいぞ」

「じゃ行こうか」と言って魔法を解くと

ボフン

「やっぱりか……だから魔法使いたくなかったんだよな」

エヴァが驚いている

「なっそっそのすがたはどうした・・・」

「あぁ、どうしてかな魔法を使うと副作用で体が7歳児になってしまうんだ。良くわからないけどな」

「・・・・いつ元に戻るんだ？？」

「今回はすぐじゃないかあんまり魔法つかってないしな」

「それよりいこうよ、エヴァ（なでなで」

「……＼＼＼あぁ」

そしてその日はテオのときと同じように一緒に寝ようとお願いされて寝ちゃいました・・・・なにもしてないからな・・・

今まで空気だった茶々丸が「マスター、撮影中撮影中」とか言ってた

期末テスト・・・

サイドなし

「しずな君，ネギ君はどうかな？」

ここは学園長室。ネギの指導教諭でもあるしずなにネギの教育自習の状況を確認している。

「ええ。生徒ともうち解けていますし，授業内容も１０歳とは思えないくらいです。この状況なら指導教諭の私としても合格点をあげてもよろしいかと」

「そうかそうか。ならばこのまま教員として採用しても問題ないじゃろうの。ではネギ君に一つ課題を受けてもらおうかの。立派な魔法使いの候補生としての」

学園長室での話題の中心となっているネギは今，今日の日直の椎名桜子と明石裕奈と一緒に廊下を歩いていた・・・・・・・

「他のクラスのみなさん，何かピリピリしてますけどどうしたんでしょうか？」

ネギの言葉の通り，廊下から他のクラスをのぞき見てみると，どこのクラスも例外なく生徒達はどこか必死の表情でなにかに取り組んでいる。てか勉強??

「ああ，それはね。期末テストが近いからだよ」

「へぇ，そうなんですか・・・・・・って，それは2ーAも同じなんじゃないですか!?」

「あはははは。うちはエスカレーターだからテストはあまり関係ないんだよね〜」

自分たちも同じ状況のはずなのにあっけらっかんとしている2人。

「!?・・・あの立派なトロフィーはなんですか?」

ネギが指すの先には花で装飾された立派なトロフィーが存在感を放っている。

「ああ。あれはね学年トップのクラスに贈られるんだけど私たちは関係ないよね〜」

「うん。万年ドベのクラスだからね」

そんなときだった。ネギの元に小走りでしずながやってきたのだ。

「ネギ先生～！」

「しずな先生。どうされたんですか？」

「学園長がネギ先生にこれを・・・」

そう言ってしずなが差し出すのは一通の手紙。その手紙には表にこう書かれていた。

『ネギ君への最終課題』と。

「《えぇ～～っ！？こんなタイミングに最終課題なんて聞いていないよ！？どうしよう。最終って事はこれがうまくいかないとクビってことだよね！？》・・・と，とりあえず内容は・・・『今度の期末テストで２－Ａが最下位脱出できたら正式な教員にしてあげる。ｆｒｏｍ学園長』ってなんだ，こんなことでいいのか～」

課題の内容が攻撃魔法１００個習得やドラゴンの討伐などをイメージしていたネギは思っていたよりも普通な課題だったので安心している。しかしこれは何よりも困難極める課題とはつゆ知らずに・・・・・・。

サイドアルス

おっす、おら孫悟kゲフンゲフン・・・アルスだ
現在俺はぬら…学園長に呼び出されている・・・

「何のようですか？ぬらり…学園長。」

「ふぉ。今明らかに妖怪の名前が聞こえたんじゃが…まぁええわ」

「で何？？」

「実はの、ネギ君に正式に先生になるための試験をやらせるのじゃよ。
それでアルス君には不干渉でお願いしたいんじゃ」

「おう、別にいいぞ面倒ごとにかかわらなくてすむならな…」

「じゃそういうことでよろしくの…」

・・・

～～教室～～

「えぇ～，それでは皆さん。この時間は期末テストも近いことですし，頑張って最下位脱出しないと僕が大変なことになりますので大勉強会を行いたいと思います！！」とネギがいう

ここ麻帆良学園には週に1回午後の授業をまるまる潰してのＨＲがある。この時間はクラスによって何をしても構わない事になっている。

すると・・・・

「はいはーい！それなら英単語野球拳が良いと思いま～す！！」

「ん、それはいいですねやりましょう。」

ん～きっと野球拳ってなんだか知らないんじゃないかな～などと考えているとエヴァから念話が…

「（アルス、どういうことだなぜ急に勉強会なんだ？）」

「（それはねエヴァぬらりひょんがネギに課題を出したからだと思うよ。）」

「（どういう内容なんだ？）」

「（たしか…２－Ａの最下位脱出だったと思うよ。）」

「（そうか、まぁどうでもいいな関係ない、）」

「（いや、少しは頑張ろうよ…成績そんなによくないんだろそんな主だと茶々丸も悲しむぞ…な茶々丸。）」

「（はい、マスターの成績が悪いと従者である私も悪くないといけませんので・・・・）」

「（…ほら茶々丸もそういってるぞ　エヴァ…どうするんだ…じーーー）」

「（マスター…じーーーー）」
二人でじーッと見つめる

「（あぁっ、わかった、わかったからその目をやめろやめてくれ・・・・っく茶々丸あとで巻いてやるからな！）」

「（ん・・・・おっと野球拳で男子の俺が居ちゃだめだな…じゃなエヴァ）」
そういって俺は教室から出て行く…

次の日ネギとバカレンジャーたちが図書館島で行方不明になるなどのイベントが発生したりした
で原作どおり２－Ａは一番になった。
ちなみに俺は学年１位だった…あたりまえだろアンサートーカー（答えを出すもの）があるんだし
超が悔しがっていたな…なっ初めて負けたネ…次は負けないヨなど

と言っていた……まぁ俺が負けるはずないけどな・・・・

かくして期末テストが終わった・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6654s/

なんとなく”ネギま”

2011年5月5日04時50分発行